

場所・面積

千葉県千葉市、2.3 ha

管理目的

遷移の途中段階である里地里山環境を維持することで、多様な環境を創出し、生物多様性の保全に貢献する。また、地域の子供達への環境学習の場を提供することと、森の管理過程を教員養成課程の学生に体験させることで、次代の担い手の育成を目的とする。

サイト概要

千葉県千葉市に位置する里地里山環境を活かしたビオトープ。水田と小川からなる水辺ゾーン、雑木林ゾーン・スギ林ゾーン・タケ林ゾーンの異なる環境より構成されていて、それぞれの環境に適応した生物が生息している。里地里山で減少傾向が懸念されている普通種が多く維持されている。自然観察・環境学習の場として、子どもから大人までが利用すると共に、大学敷地内に併設されている特徴を活かし里地里山の管理に関する実践的学習を含めた人材育成の場ともなっている。



土地利用の変遷

元々はイヌシデ-コナラ群落とスギ林とタケ林のゾーンからなる放棄地であり、林床はアズマネザサで覆われ人が容易に立ち入れる環境ではなかった。アズマネザサを刈り取って地表面を露出させたり、スギやタケを間引く等することで、地表面が露出し春植物が見られるようになる等、多様な植物環境が出現するようになった。現在は人の手を加え続けることで遷移の途中の状態を維持・管理している。

サイト周辺の環境

千葉県千葉市の台地部分に位置し、南東側（東京湾側）には住宅地が広がっている。北東側はより広大な民間のスギ・ヒノキ林や雑木林、市民の森、及び印旛沼へとつながる鹿島川支流の最上流部の谷津の一つに接している。

アピールポイント

ビオトープ祭りやホテル観賞会等のイベントを通して、地域の方々に森の恵みを還元している。また、地域の幼稚園・小学校・高等学校、及び大学の園児・児童・生徒・学生の環境学習の場として積極的に活用している。

植栽や動物の導入を行う際は、全て地域の在来種としている。

サイト名に「共生」とつけているのは、大学のコンセプトであるインクルーシブが基本概念にあり、年齢・性別・障害の有無に関係なく誰もが社会や自然の中で過ごせることを願ったことである。

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】

大学の敷地内にあり、二次林の雑木林、水田・ため池・小川、スギ林、タケ林の4つのゾーンから形成されている。水田では有機栽培で古代米を育てている。雑木林ゾーンでは間伐材を活用して椎茸栽培を行ったり、クワガタのための産卵木としている。また、カブトムシのために落葉溜めを4か所設置している。一部は野生生物の生息のために人の手を入れていない部分もあるが、林床の下草刈りなどの管理をしているため、明るい森となっている。

【主な植生】

水辺ゾーンの主な植生は、イネ・ガマ・タチツボスミレ等である。

雑木林ゾーンの主な植生は、イヌシデ・クヌギ・コナラ・フジ・アズマネザサ（ウグイスの繁殖・小動物の隠れ場所として一部伐採せず残している）等である。

スギ林ゾーンの主な植生は、スギ・ヒノキ・フタリシズカ・ホウチャクソウ等である。

タケ林ゾーンの主な植生は、マダケ・マンリョウ等である。

【確認された主な動植物】

スズメバチ類（早川 2016）、43種の鳥類（早川 2017）、154種の植物（早川 2022）、10種の哺乳類（早川 2023）が生息していることを確認している。この他に爬虫類では、アオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシ・ニホンマムシ・シロマダラ・ニホンヤモリ・ニホンカナヘビ・ニホントカゲを確認している。両生類では、アズマヒキガエル・ニホンアカガエル・ニホンアマガエル・シュレーゲルアオガエルを確認している。



写真の撮影年月：2019年7月

写真の説明：雑木林ゾーンを徘徊するタヌキ



写真の撮影年月：2021年4月

写真の説明：雑木林ゾーンに咲くタチツボスミレ

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

水辺・雑木林・スギ林・タケ林の4つのゾーンから形成されており、多様な環境に適応した生物がそれぞれ生息している。

【主な植生】

水辺ゾーンの主な植生は、イネ・ガマ・タチツボスミレ等である。

雑木林ゾーンの主な植生は、イヌシデ・クヌギ・コナラ・フジ・アズマネザサ（ウグイスの繁殖・小動物の隠れ場所として一部伐採せず残している）等である。

スギ林ゾーンの主な植生は、スギ・ヒノキ・フタリシズカ・ハウチャクソウ等である。

タケ林ゾーンの主な植生は、マダケ・マンリョウ等である。

【確認された主な動植物】

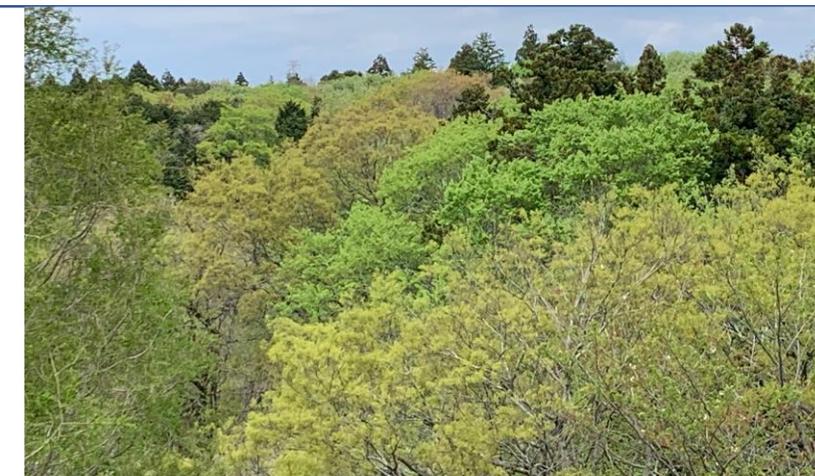
6種のスズメバチ類（早川 2016）、43種の鳥類（早川 2017）、154種の植物（早川 2022）、10種の哺乳類（早川 2023）が生息していることを確認している。この他に爬虫類では、アオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシ・ニホンマムシ・シロマダラ・ニホンヤモリ・ニホンカナヘビ・ニホントカゲを確認している。両生類では、アズマヒキガエル・ニホンアカガエル・ニホンアマガエル・シュレーゲルアオガエルを確認している。外来種は水辺ゾーンに侵入してくる草本類を中心に30種あり、特定外来生物のオオハンゴンソウやアメリカザリガニ等、積極的に駆除している。

エノキのシンボルツリーがあり、数多くのヤマトタムシが現れることが特徴である。



写真の撮影年月：2021年4月

写真の説明：ハウチャクソウとアケビ



写真の撮影年月：2022年4月

写真の説明：「植草共生の森」外縁部の様子（左は森の外に植樹されているメタセコイヤ）

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

水辺・雑木林・スギ林・タケ林の4つのゾーンから形成されている。

【確認された希少種】

《 環境省レッドリスト 》

準絶滅危惧種 チュウサギ・オオタカ

ほか、希少な植物2種の生育が確認されている。

《 千葉県レッドリスト 》

絶滅危惧Ⅰ類 フクロウ・コサギ・ニホンマムシ・シロマダラ・ニホンアカガエル

絶滅危惧Ⅱ類 アカゲラ・カッコウ・ノスリ・ホオジロ・ホトトギス・ミソサザイ・ウグイス・シマヘビ・アズマヒキガエル

準絶滅危惧種 ヒミズ・カケス・ダイサギ・ツミ・ヒバリ・アオダイショウ・ニホンカナヘビ・ニホンヤモリ・ヤマカガシ・シュレーゲルアオガエル
ジュウニヒトエ・ヒメコウゾ



写真の撮影年月：2021年3月
写真の説明：アズマヒキガエル



写真の撮影年月：2015年5月
写真の説明：ジュウニヒトエ

サイトの管理計画・モニタリング計画

管理計画の内容	モニタリング計画の内容
<p>大学職員・学生・外部団体の代表によって構成されている「植草共生の森運営部会」が、年度初めにその年の計画（アクションプラン）を話し合い決定している。その計画に基づき、大学職員、及び外部団体（一般社団法人グループ2000・千葉県生涯大学校OB有志・特定非営利活動法人ちばサイエンスの会）の方々と、毎月環境整備活動を実施している。なたこれとは別に、学生組織の「共生の森人」も平均して2か月に1回の頻度で整備活動を行っている。</p> <p>以下、アクションプランより抜粋。</p> <p>②園内の維持・向上：6～12月にアズマネザサ刈り、11,12月に落ち葉掻きなど</p> <p>③植物の植樹と管理：12～3月に竹の伐採及び散策路用のチップの作製など</p> <p>④田んぼの育成管理：5月に田植え、10月に稲刈り、11月に田起こしなど</p> <p>⑤ホタルの育成環境づくり：5～8月土手の植生管理・モノアラガイの育成など</p>	<p>【モニタリング対象】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植草共生の森を構成している動植物 ・これまでに哺乳類・鳥類・スズメバチ類・植物についてモニタリングを行ってきたので、今後はこれ以外の分類群のモニタリングを行う（2023年は甲虫類のモニタリングを予定）。 <p>【モニタリング場所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植草共生の森 <p>【モニタリング手法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物多様性の価値によってモニタリングの手法を変えることはないが、対象種により手法は異なる（2023年はライトトラップとベイトトラップを実施予定）。 <p>【実施時期及び頻度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的には毎月1回実施するが、大学構内にあるため、簡易なものは毎日実施する。 <p>【実施体制】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植草共生の森運営委員会では毎月1回管理作業を行っているため、その作業と並行して環境のモニタリングを行う。ただし、モニタリングの対象によって同定が難しい場合は、専門性の高い千葉県立中央博物館の学芸員の協力を得て実施する。 ・毎月作業している学生組織の「共生の森人」でも、活動時にモニタリングする。